

第36回 医療技術者セミナーのご案内

ーセミナー開催にあたってー

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が全世界で流行して、3年が過ぎようとしています。この間、COVID-19に対して様々な研究が行われ、検査法や治療法、対策が確立されてきました。

私達医療従事者も、流行し始めた時は、手探りの状態での対応でしたが、時間が経つに従い各々の立場で対応策を見出し、患者さんへ医療を提供してきました。それと同時に、感染拡大により停滞していた各々の「会」の活動も徐々に再開されてきました。

今回の医療技術者セミナーは「COVID-19 禍における医療職の活動報告」として、最前線で検査や治療にあたられた先生と、各々の「会」がどのようにして会の活動を再開していったのかについて講演をして頂きます。是非、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

福岡県医療団体協議会 会長 外山 洋子

メインテーマ 『COVID-19 禍における医療職の活動報告 』

* プログラム *

日 時 令和5年2月18日（土） 13:40～16:05 （受付 13:00 より）

会 場 ナースプラザ福岡 1階 研修ホール

後 援 福岡県・福岡県医師会

1. 挨拶 13:40～ 福岡県医療団体協議会 会長 外山 洋子

2. 特別講演 13:45～14:45

演 題 『新型コロナウイルス感染症 ～未曾有のパンデミック経験を未来に活かす～ 』

講 師 稲光 毅 先生 （いなみつこどもクリニック）

座 長 福岡県医療団体協議会 会長 外山 洋子

3. シンポジウム 『COVID-19 禍における医療職の活動報告 』 14:50～16:05

【臨床衛生検査技師会】新型コロナウイルス感染下における福岡県臨床衛生検査技師会の活動と今後（大久保 文彦）

【診療放射線技師会】COVID-19 禍における医療職の活動報告（小沢 芳博）

【看護協会】COVID-19 禍における看護師としての取り組み～患者に寄り添った看護の実践～（倉地 美智子）

【栄養士会】COVID-19 禍における栄養科の取り組み（大村 美保）

座 長 福岡県医療団体協議会 副会長 中村 泰彦

※ 事前申込の必要はありません。参加費は無料です。

■■ 特別講演 ■■

『新型コロナウイルス感染症 ～未曾有のパンデミック経験を未来に活かす～』

稲光 毅 先生 （いなみつこどもクリニック）

2019年12月に中国武漢市において1例目が報告された新型コロナウイルス感染症は、流行の消長を繰り返しながら全世界に広がり、2023年1月までに世界で6億人を超える感染者、750万人の死亡をもたらした。歴史を振り返ると、中世のペストほどではないものの、今、私たちは1918年から始まったスペイン風邪に比する100年に一度のパンデミックの只中にいると言える。今回のパンデミックでは、ウイルスや感染に関する医療情報が国境を越え共有され、また生命科学の進歩によりPCR検査、抗原迅速検査が速やかに普及し、信じがたい速さで有効性の高いワクチンが実用化された。にもかかわらず、これだけの規模の犠牲が生じたことについて、感染症としてだけではなく大規模災害としての視点からの対応が求められた。診療体制の構築を中心として今回の経験を振り返り、次の新興・再興感染症に向け何を残すことができるのか考えてみたい。

『新型コロナウイルス感染下における福岡県臨床衛生検査技師会の活動と今後』

大久保 文彦（九州大学病院 病理診断科・病理部 主任臨床検査技師）

【はじめに】新型コロナウイルス感染症の影響により、福臨技の活動も延期・中止としたが、2020年8月よりオンラインを用いた研修会を開始した。

【with コロナの初期対応】オンラインシステムの整備：各地区に専用のアカウントを設け地区長の管理とした。運用ルールの整備：操作方法是、運営側、参加者それぞれの運用手順を作成し、また様々な質問や課題に対して質疑応答集を作成した。要望や問題点は随時アップデートし、アカウントは現在6アカウントで運用している。

【研修会の回復状況】2018年度と各地区主催の学術部門研修会を比較すると、2018年度は、参加者6047人/210回（平均28.8人）、2020年度は2366人/63回（平均37.9人）、2021年度は4780人/109回（平均43.9人）であった。参加人数は79%の回復率であるが、参加平均人数は28.8人から43.9人と増加し、今まで参加ができていた環境下の会員の参加が認められた。

【今後】現在は運営側が企画し、会員へ情報提供しているが、各施設での日頃の問題点や課題について、会員同士で自由に利用できるオンラインシステムの対応が必要である。

『COVID-19 禍における当院での診療放射線技師の活動報告』

小沢 芳博（福岡大学病院 放射線部 主任）

2020年2月から、新型コロナウイルスを身近に感じ始めて3年あまり、現在はwithコロナ禍となっている。第8波に入り今この瞬間も対応に追われ職務を全うされている医療職の皆様がおられますことを頭の片隅に留めつつ、このセミナーが少しでも有意義な時間となることを期待する。今回のテーマ「COVID-19 禍における医療職の活動報告」について当院が経験したことや、実際の検査においての他職種の方々との関わり、そして情報共有の大切さについて話をさせて頂く。また、第1波から現在までの感染者数を見ながら私たちがその時々をどのように対応していたかを分かりやすく振り返りが出来ればと思っている。このシンポジウムが皆様との意見交流の場となれば幸いである。

『COVID-19 禍における看護師としての取り組み ～患者に寄り添った看護の実践～』

倉地 美智子（社会医療法人 製鉄記念八幡病院 副院長兼看護部長）

COVID-19 重点医療機関として2020年4月よりCOVID-19患者の受入れを開始した。当初は、感染症に対する設備がない状況での受入れ決定に対し、看護師は自身の感染リスクに対する不安を多く抱えていた。そのため、感染防止対策に重点を置き患者との接触時間を最小限にと職員を守ることが第一優先にされていた。その後、感染拡大を繰り返す中でCOVID-19受入れ病床確保のフェーズに応じて、病床数を増床するとともに1週間という短期間で看護師の増員配置を行い、多くの看護師がCOVID-19患者の看護に携わった。

COVID-19の流行から3年が経過し、看護師は、不安や葛藤、ストレスを抱えつつ、感染対策に加え認知症患者、終末期がん患者のケア、患者の看取りなど患者の一番そばにいる看護師として患者個々に必要なケアを考え「患者に寄り添う看護」を提供できるよう変化した。今後は、長期化するCOVID-19 禍において、看護師の疲労感は強くなっており、患者をケアする看護師の心身の負担軽減が大きな課題と考える。

『COVID-19 禍における栄養科の取り組み』

大村 美保（国家公務員共済組合連合会 千早病院 栄養科 栄養科長）

新型コロナウイルス感染症発生から、約3年が経過し医療の場における栄養科の対応も大きく変化した。新型コロナウイルスの流行に伴い、各施設においても様々な感染防止対策を講じて対応している。入院患者の食事提供、栄養管理、栄養指導、他職種カンファレンスへの参加など患者と対応する管理栄養士・栄養士、調理・配膳業務等の従事者の健康と安全確保の観点から感染予防に努め、日常業務に加え対応しなければならない状況である。

今回、栄養科における新型コロナウイルス感染症にかかわる給食管理業務および臨床栄養業務等の取り組みについて、まとめたので報告する。また感染により引き起こされる栄養障害についても注意が必要であり、あわせて報告する。